

# 地理情報システムを用いた城下町の復原的研究

—彦根城下善利組足輕屋敷地区を中心として—

## Restoration-Study on the old castle town Hikone with the GIS

生方 美菜子 濱崎 一志  
Minako UBUKATA Kazushi HAMAZAKI

滋賀県立大学大学院 人間文化科学研究科 地域文化学専攻  
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500

Graduate Student of human cultures, The University of Shiga Prefecture  
2500 Hassaka-cho, Hikone, Shiga 522-8533

あらまし：都市には多くの情報が隠されている。例えば街区、宅地の形態・規模や、その場所に関する情報などが現況の中に潜在している。これらの性格の異なる情報は文字情報としてとらえることもできるが、情報量が膨大なものとなるため地域の歴史研究をすすめていく上で、大きな困難と混乱が生じている。

そこで地理情報システムを用いてこれらの情報の有効活用ができないかと考えた。本研究は彦根城下町を対象とし、城下町景観の特徴を顕著に残す足輕屋敷の変遷やその現況を分析する。方法としては位置情報を表すデジタルマップに属性情報を表すデータベースをリンクさせる。さらに、測量精度の高い古絵図をラスターデータとしてはりつけることにより、歴史的都市の骨格の変遷をたどり、文字情報とリンクして新たな視点から都市の復原ができないかと考えた。今回は、測量精度、描画技術の高く城下町景観を詳細にあらわす「御城下惣絵図」をその背景にはり、現状及び異なる時代との比較の時空間分析を試みた。さらに景観要素を抽出し、デジタル化を検討する。本研究は、それらの要素のより適切な関連づけを、空間情報と時系列情報の両方面から目指し、地域文化財の保存を念頭におき、地理情報システムを用いた歴史的景観復原を試みた。

Outline: Many information is hidden in the city. For example, the form and the scale of a town-block and a housing site, the information in connection with the place, etc. are latent in present condition. When recommending history research of an area since the amount of information will become huge although the information from which such character differs can also be caught as character information, big difficulty and big confusion have arisen.

Then, it was thought whether effective practical use of these information could be performed using a Geographic

information system. This research analyzes changes and its present condition of the common foot soldier mansions which leave the feature of landscape notably for the Hikone castle town. The database showing attribute information is made to link to the digital map which expresses spatial information as a method. Furthermore, it was thought whether changes of the frame of a historical city would be followed, it would link with character information, and city restoration could be performed from a new viewpoint by sticking old map with high survey accuracy as raster data. "Gojoukasouezu" which survey-accuracy and drawing technology are high, and expresses a castle town landscape in detail was stuck on the background and the analysis between spatial and temporal was tried the comparison with the present condition and a different time. Furthermore, landscape elements is extracted and digitization is examined. This study tried the historical landscape restoration of series information using aim at both from a field and the Geographic information system bearing preservation of regional cultural assets in mind related attachment more suitable than those elements' at spatial information and temporal information.

キーワード：地理情報システム／地域文化財／城下町／古絵図  
Key words : GIS:Geographic Information System/Regional Cultural asset/Castle town/old map

## 1、はじめに

近年、地域文化財に焦点をおき、その地域の景観復原を試みるにあたり地理情報システム (GIS: Geographic Information System) が利用されはじめている。地理情報という視点から景観復原を考えていくと、それらの代表的な資料として、古絵図、紙地図、位置情報がテキストとして含まれた文献史料、航空写真等がある。これらの位置情報と歴史的情報を用いることによって、様々な時空間分析が可能となる。

しかし、それらの地理情報システムを用いて時空間分析を行っている現状は、手法を試行錯誤する段階である。古絵図のデータベース化による時系列分析、歪み補正や正図化による空間分析が行われているが、指標となるものは未だできていない。歴史的環境及び景観、地域文化財の情報を含むものをデジタルデータとして変換し、地理情報システム上で用いていくのがいかに困難であるかをあらわしている。

地理情報システム上で用いられている代表的な要素としては、ベスマップとしてのベクターデータとその参照のためのラスターデータ (画像データ)、そしてデータベースとしてテキストデータのリンクが考えられる。本研究は、それらの要素のより適切な関連づけを、空間情報と時系列情報の両方面から目指し、具体的に単一の地域を対象にし、地域文化財を念頭におき、地理情報システムを用いた景観復原への試みしたい。

## 2、研究の対象・目的

彦根は、城郭と城下町が揃って残っている。その城下の足軽屋敷地区は町人地の立花町・魚屋町とともにその面影を色濃く残す地区のひとつである。彦根市は将来的に足軽組屋敷を残していきたいと考え、また、現在そこに住んでおられる方々からも残していきたいという強い希望が出ている。特に、善利組足軽屋敷では保存会も設立されており、地域の人たちの足軽屋敷への強い愛着のある地区である。これまでには彦根藩足軽組屋敷の平面型についての研究 (1998 室谷) がなされている。

それらの保存という視点からそのさきがけとして、足軽屋敷の景観復原を地理情報システムを用いて試みるのが本研究の目的である。古絵図、文献史料に含まれるテキストデータのデータベース等の位置情報及び属性情報を地理情報システムのソフトウェア<AutoCAD Map 2000>上にとりこみ、現状と当時の状態を彦根城下・足軽屋敷中心に分析する。

## 3、方法

本研究においては、GIS ソフトウェア<Auto CAD Map 2000>を用い、ベスマップとしてのデジタルマップ、背景としての画像データ、テキストデータであるデータベースをとりこむ。基本となる彦根デジタルマップのオブジェクトにテキストデータであるデータベースをリンクさせ、建物と照合させる。同時に、背景として絵図・航空写真の画像データをレイヤー構造のなかに配置し、現状と当時の比較を行う。

### 3-1 ベスマップ

#### 3-1-1 ベクターデータ

##### ○彦根 デジタルマップ

地理情報システム利用という観点からベスマップとして不可欠なのがベクターデータである。その基礎資料として代表的なものが国土地理院発行の数値地図 2500 (空間データ基盤) である。しかし彦根市近郊はまだ発行されていない。そこで当研究室において平面直角座標系第VI系にのっとり紙地図からデジタルマップを作成した。入力に用いた紙地図は、彦根市現状平面図 (縮尺 1/500) 及び都市計画図 (縮尺 1/2500) である。従って、オブジェクトひとつひとつに座標情報が盛り込まれている。

主に閉じられたポリラインで構成している建物オブジェクトをトポロジー化しポリゴンとした。建物ごとに、地籍地番の情報を付し、それを<キー>とし、建物とデータベースをリンクさせる。地籍地番を用いる理由は、建物の位置情報が住居表示の番号と地籍地番がそれぞれ別個に併在しているところにある。また、地籍地番は規則性をもって配置され、今後変化する可能性が少ないと推測し、位置情報の基盤として採用した。ここでは「BLUE MAP 住居表示地番対象住宅地図」を用いて入力した。

#### 3-1-2 ラスターデータ (画像データ)

##### ○「御城下惣絵図」(天保七年 1836)

—彦根城博物館蔵—

6枚分割の絵図として伝わり、伝存する城下町絵図としては最も詳細なものとされる。方位や距離などは若干の誤差はあるものの、江戸時代後期の城下の形態をほぼ正確に伝えていると考えられる。善利組足軽屋敷地は約七百戸を数え、城下の足軽組屋敷のうちで最も戸数の多い地区であることを示している。

構成要素としては、屋敷地領域の位置情報とそれに付されている氏名・身分・間口サイズの文字情報を主として、道・河川・溝等が描かれている。

・部分画像データとして解像度 600dpi で街区ごとにスキヤニングしたものを貼り付ける。歪みの著しいものは伸縮させる機能（ラバーシーティング＝幾何補正）で調整する。これは表記されている氏名が読み取れる程度である。

・全体画像データとして、解像度 200dpi で足軽屋敷全体をスキヤニングしたものを貼り付ける。これは屋敷地割の輪郭を視覚で捉えられる程度である。

○航空写真（昭和五十七年 1982）

・部分画像データとして解像度 600dpi で足軽屋敷の部分をスキヤニングしたものを、背景として貼り付ける。これは建物の輪郭を視覚で捉えられる程度である。

・全体画像データとして解像度 200dpi で区画ごとにスキヤニングしたものを、背景として貼り付ける。

○航空写真（昭和三十六年 1961）

・解像度 300dpi でスキヤニングしたものを、背景として貼り付ける。

○航空写真・米軍撮影（昭和二十二年 1947）

・解像度 300dpi でスキヤニングしたものを、背景として貼り付ける。

### 3-2 テキストデータ

○彦根民家調査カルテデータベース

当大学人間文化学部生活文化学科土屋研究室が調査しデータベース化したものを用いた。主に昭和前半以前の民家を対象にしている。

・地籍地番を<キー>とし、彦根デジタルマップ及び県税務課作成の昭和 20 年以前建築の民家データベースとリンクさせる。

○家屋台帳・昭和 20 年以前建築の民家データベース

県税務課が、昭和 20 年以前に建築された建物をデータベース化したものである。所在地は地籍地番で表記されている。

・地籍地番を<キー>とし、彦根デジタルマップ及び彦根民家調査カルテデータベースとリンクさせる。

○「御城下惣絵図」（天保七年 1836）データベース

屋敷地領域に付されている氏名・身分・間口サイズの文字情報をデータベース化したものである。そのひとつひとつのレコードは屋敷地領域ポリゴンに付していく。

### 3-3 分析手法の検討

ここで二つの視点でもって、分析のより有効な手法を検討する。

#### 3-3-1 マクロ的

彦根城下町全体から足軽屋敷地区に向けて視点を運び、いかにも上空から彦根城下町を見ているかのように、城下町全体の景観を概観する。地形・街区・河川・堀割等の変化を分析する。

○彦根デジタルマップ

○「御城下惣絵図」（天保七年 1836）

○航空写真（昭和五十七年 1982）

○航空写真（昭和三十六年 1961）

○航空写真・米軍撮影（昭和二十二年 1947）

○家屋台帳・昭和 20 年以前建築の民家データベース

#### 3-3-2 ミクロ的

足軽屋敷地区から屋敷地及び民家等に向けて視点を運び、いかにもその屋敷群を歩いているかのように、足軽屋敷の町なみを概観する。データベースとリンクさせることによって、町なみの塀や生垣の連続面、道幅、溝、民家一軒一軒そしてそのディテールに及ぶまで分析する。

○彦根デジタルマップ

○「御城下惣絵図」（天保七年 1836）

○航空写真（昭和五十七年 1982）

○航空写真（昭和三十六年 1961）

○航空写真・米軍撮影（昭和二十二年 1947）

○彦根民家調査カルテデータベース

○家屋台帳・昭和 20 年以前建築の民家データベース

○「御城下惣絵図」（天保七年 1836）データベース

#### 3-3-3 分析対象の善利組足軽屋敷について

足軽居住区というのは 50 石以下の武士の居住していた地区で、江戸時代には簡単な塀、棟門のついた平屋の妻入り、ないし平入りの足軽屋敷が並んでいた。その足軽居住区において長屋の建築が多いのが特色である。今回はケーススタディとして足軽屋敷における長屋に焦点をおく。このデータは、当大学人間文化学部生活文化学科土屋研究室が調査したものである。

長屋は都市における借家人住宅で、外見上は町家とほぼ同じで道に面しており、異なるのは境壁を隣同士で共有して建っている点である。また、間口が町屋より狭いなど、建築物としての質は高くない。長屋の分

類として a 平屋、b 低長屋、c 高長屋がある。b は低二階長屋をしめし、c は高二階長屋を示し、隣と 2 軒にまたがって、入母屋破風のついたものもある。データ上では a 平屋、b 低町家、c 高町家と記している。長屋の経年変化をみると、明治元年では圧倒的に低町家が多く建設されているものの、それ以降はほとんど建てられていない。逆に、高町家は明治後期頃から徐々に建て始められ、大正後期には大半は高町家になっている。この傾向は町家と同様で使い勝手のよい高町家タイプの長屋が受け入れられていたことが考えられる。足軽居住区は武士居住区と同じような変遷がみられ、江戸時代からの足軽屋敷は多く残ったものの、明治に入ってから町家や堀付 2 階建が主流となっている。

このほかに間口サイズにも顕著な傾向が見られる。

このように、彦根民家調査カルテデータベースの各項目から、身分的居住区、建築種別、建築年代、表構え等の分類によって足軽屋敷の町なみの変遷、現状における残存状態をつかむことができる。

### 3-4 「御城下惣絵図」デジタル化の試み

ここで用いた「御城下惣絵図」は絵図をスキヤニングした画像データ、いわゆるラスターデータである。彦根デジタルマップは建物の位置情報の盛り込まれたデジタルデータで構成されている。今回ミクロ的にみた場合、ラスターデータの状態では「御城下惣絵図」はデータベースとリンクできない。さらに、絵図は屋敷地領域を示しており、現況との比較は建物の重なりを視覚的でしか判断できない。しかし、ラスターデータには重要な景観要素が含まれているので、それらをいかに抽出・認識するか、言い換えてみれば、ラスターデータの景観要素をいかにベクター化するかが重要な問題である。方法としては、認識・抽出の判断基準を定め、ラスターデータをトレースし、ベクターデータを作成することである。今回は屋敷地領域と道、河川、水路、溝等をトレースしベクターデータとする。そして「御城下惣絵図」の主構成要素である氏名・身分・間口サイズ等をデータベース化したものを位置情報でリンクさせる。

## 4 考察

彦根城下町形成後において「御城下惣絵図」という精度の比較的高い絵図を背景にして、彦根デジタルマップ、航空写真を貼り時系列で比較した。絵図に座標値は表記されていないため、城下町当時の地点と

変化がないと予想のつく地点を対照点として貼りつける方法がある。この方法はその地点の一致が大前提となるが、その同定ができれば、絵図の貼り込みは非常に有効になる。あまりにも歪みが著しい場合上記したとおり伸縮させる機能（ラバーシーティング＝幾何補正）で調整するが、今回マクロ的にみる場合にその必要性はなく、2 点を対照させ縮小拡大編集のみで済ますことができた。

上記の二つの分析手法から以下のことが言えるであろう。街区及び道幅はほとんど変化せず現在にいたると考えられる。また、「御城下惣絵図」のひとつひとつの屋敷地領域をみていくと、当時の屋敷地配列を推測することができる。建物の変遷はわからないが、現況と比較して屋敷地の配置にそれほどの変化がないことが推測できる。このようにラスターデータという画像としての情報のままに、時系列で照合できる絵図の貼りこみは有効であると考えられる。

また今回は「御城下惣絵図」のベクターデータ化を試みた。上記のラスターデータの貼り込みから得られる情報以上のものが期待できる。それは絵図の屋敷地領域ポリゴンと建物ポリゴンのオーバーレイにより、絵図から作成したテキストデータベースの構成要素の氏名・間口サイズの比較ができることである。

しかし、より有効かつ適当に利用するには課題は多い。文字情報及び図や絵をどのように分析させていくかが、それは要素ごとにデータベース化することが適当であろう。どのような項目を設定したらいいのか等いかにデータベース化するか、が課題である。

今回は主に「御城下惣絵図」を用いて、景観要素の抽出とベクターデータ化、文字情報のテキストデータ化、そしてそれらのより適切なリンクを目指し、現況の比較を行い、手法の一つの試みとした。しかし、そのより有効かつ省力的な方法を検討していく必要がある。例えば、今回は、「御城下惣絵図」で試みたが、彦根城下町に関する絵図の一つである「彦根藩侍屋敷之図」（文政十二年 1829）の写しからも同様の試みを行うことで、更にその変遷と分布分析を多元化できるだろう。

## 5、今後の課題

地域文化財という観点から景観復原を考える時、文献史料・絵図が重要な史料である。今後はその史料から、いかに景観要素の抽出をしていくか、が最重要課題であると考えられる。地域文化財の要素としては、寺社

仏閣・樹木植生・河川・水路・溝等が考えられるが、それらは位置情報の確立が困難である。例えば絵図の場合、測量精度や描画技術、紙ベース資料ゆへの劣化等の問題も潜在している。それらの問題も加味しながら、その要素を史料から認識・抽出し当時と現状とを比較・検証し、地域文化財を分析するということが重要であろう。もう一段階としてその要素をいかにベクター化するかという手法の検討が多分に必要である。今後は、系統立てて時間軸で追ういわゆる時系列分析の可能性を探り、その手法を検討していきたい。

\*景観…本研究において、地理学的視点から、景観とは周辺空間とはっきり識別できるような一定の特徴を有する空間単元を形成しているもの、として捉えている。

\*地籍図・地籍地番…明治6年(1873)7月、地租改正条例が公布され、土地の測量作業が本格化する過程で、村ごとに縮尺600分の1の地籍図が作成された。地券取調総絵図、地引絵図などと呼ばれるこの地籍図は土地一筆ごとに境界、地番、面積が記入され、地目が屋敷、田、畠などによって彩色されており、小字名が記載されている。

#### 参考文献

- 出田和久・木村圭司・宮崎良美 「古地図に描かれた内容のデータベース化のためのシステム構築」『古地図に描かれた内容のデータベース化のためのシステム構築』1999
- 黒川隆夫 「江戸図データベースとその応用」『講座 人文科学のための情報処理 データベース編』尚学社1998
- (社)日本観光協会 『城下町彦根の町なみ-歴史的景観の調査と保存修景-』2000
- 中村和郎・手塚章・石井英也 『地域と景観』古今書院 1991
- 彦根市教育委員会 「彦根藩データノート 善利組屋敷(リーフレット)」
- 彦根市史編纂委員会 『彦根市史』
- 彦根城博物館 『彦根の歴史-ガイドブッカー』 1991
- 星野秀和・久保紀重・飯村威・田宮彰弘・飯田剛輔・平井政二・大伴真吾 「空間情報と時系列情報の統合化に関する研究 -道路・交通情報管理のためのプロトタイプング-」『GIS-理論と応用, 1999, Vol. 7 No. 2』 GIS学会誌 1999
- 室谷 誠一 「彦根藩足軽善利組屋敷の平面型について」 日本建築学会学術講演梗概集 1998
- 油浅耕三 「古絵図による地域の歴史的環境に関するGISの構築-柏崎市における試み-」『地理情報システム学会講演会論文集 Vol. 9』 地理情報システム学会 2000

○ラスターデータ (画像データ)

	貼り付け範囲	縮尺	解像度
「御城下惣絵図」 (天保七年 1836)	足軽屋敷 1 街区	—	600dpi
	足軽屋敷全体		200dpi
航空写真 (昭和五十七年 1982)	足軽屋敷全体	1/10000	600dpi
	彦根城下ほぼ全域		200dpi
航空写真 (昭和三十六年 1961)	彦根城下ほぼ全域	1/10000	300dpi
航空写真・米軍撮影 (昭和二十二年 1947)	彦根城下ほぼ全域	1/40000	300dpi

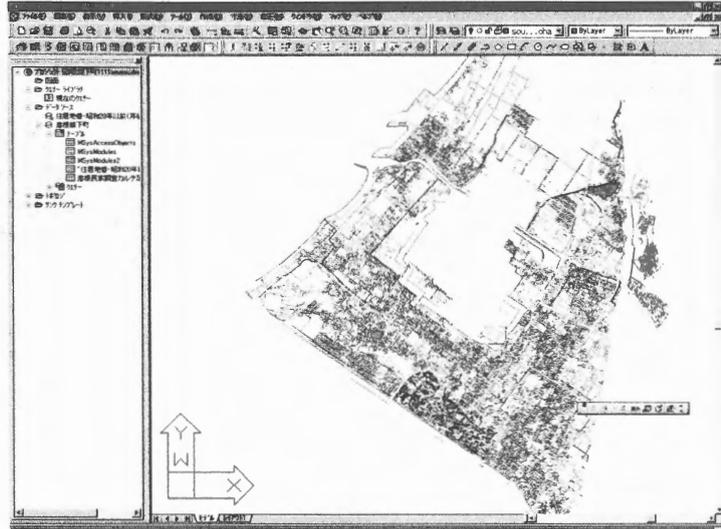
○テキストデータベース (フィールド一覧とキー設定)

	彦根民家調査カルテ DB	家屋台帳・昭和 20 年以前建築の民家 DB	「御城下惣絵図」 (天保七年 1836) DB
主な項目 <キー>	旧住所 (地籍地番) 現住所 建築年 氏名 土地身分  間口 1 階軒高 2 階軒高 建築種別武士住宅 建築種別町家 建築種別長屋 改造 (度数評価) 町家 屋根 卯建 (有無) 地棟 (本数) 袖壁 (有無) 軒裏 2 階壁面 2 階後室 2 階開口部 1 階開口部 門 塀 塗籠  他	所在地 (地籍地番)  建築年  用途 延床面積 1 階面積	氏名 身分  間口

### 3-2 ベースマップ

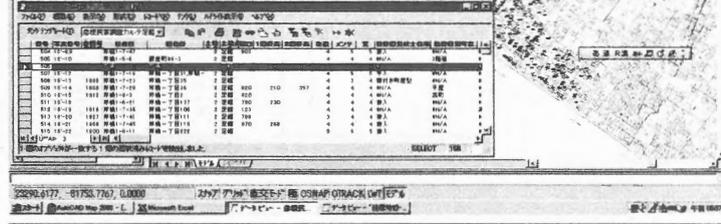
#### 3-2-1 ベクターデータ

- 彦根デジタルマップ  
彦根市現況平面図 (S:1/500)  
彦根市都市計画図 (S:1/2500)による

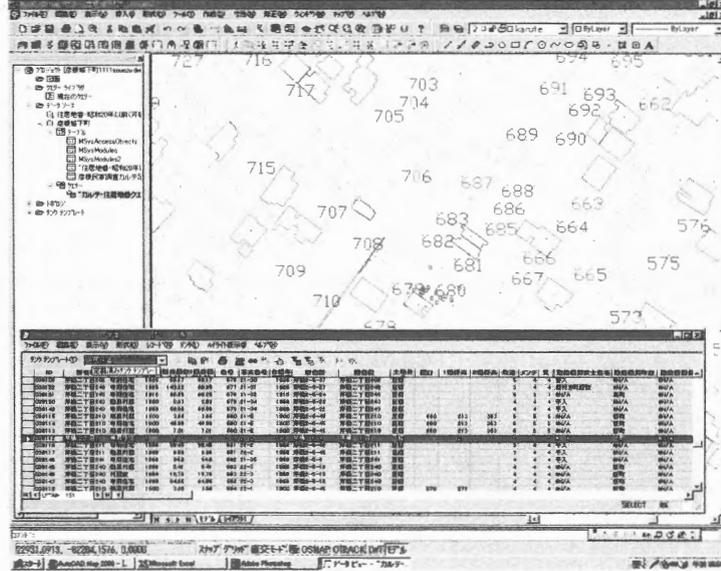


### 3-2 テキストデータ

- 彦根民家調査カルテデータベース
- 家屋台帳昭和20年以前建築の民家データベース

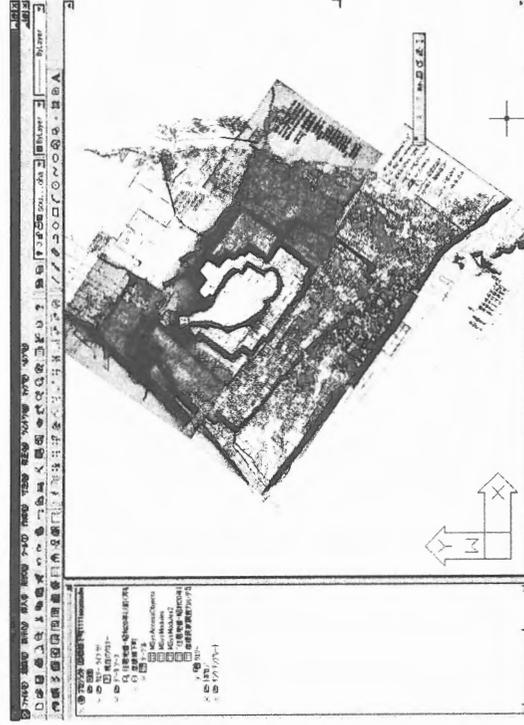


- 彦根民家調査カルテデータベースと家屋台帳データベースのクエリーにリンクした建物オブジェクト



### 3-3-1 マクロ分析の検討

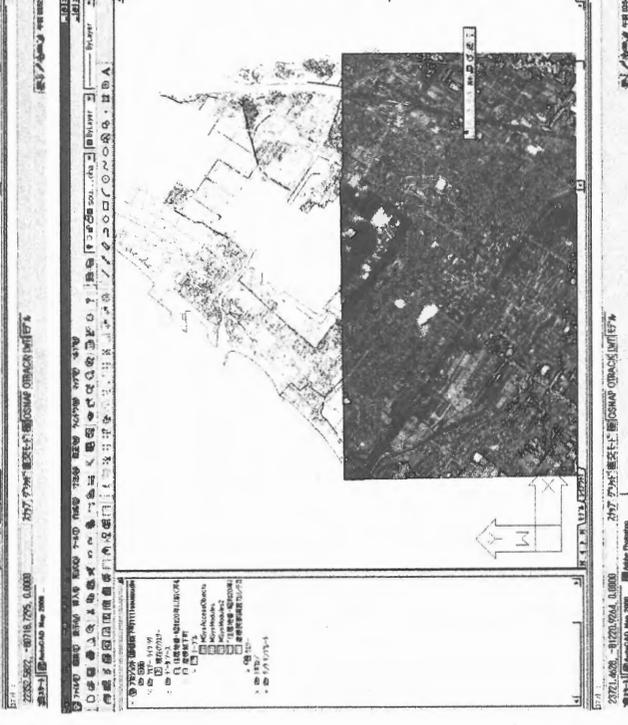
- ・御城下惣絵図(1836)  
6枚分割の絵図を貼る際、  
編集は尺度変更のみである
- ・彦根デジタルマップ



- ・航空写真(1947) 米軍撮影
- ・彦根デジタルマップ



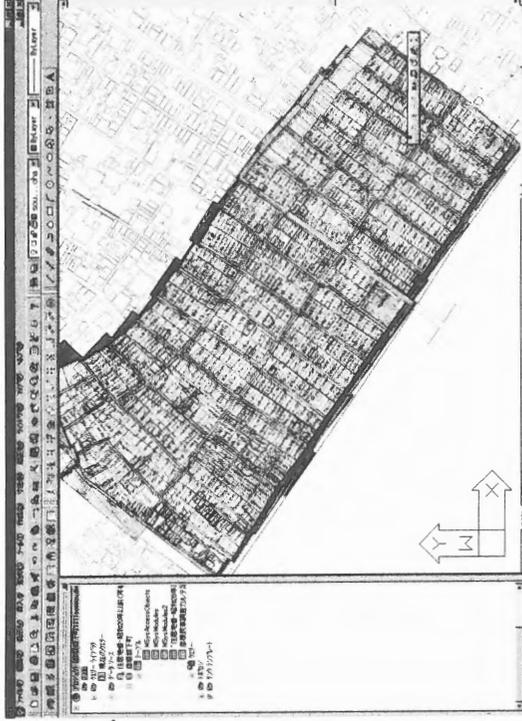
- ・航空写真(1982)
- ・彦根デジタルマップ



### 3-3-2 ミクロ分析の検討

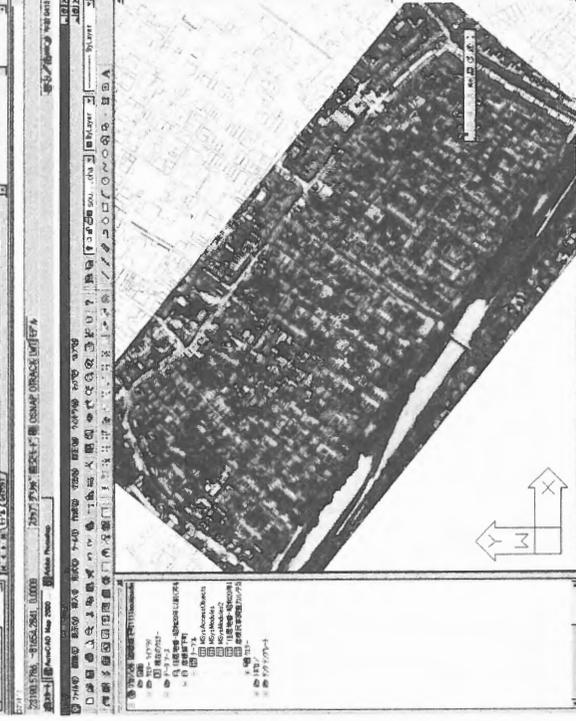
- ・御城下惣絵図(1836)  
歪みを小さくするため街区毎に貼るが、  
編集は尺度変更のみである

- ・彦根デジタルマップ



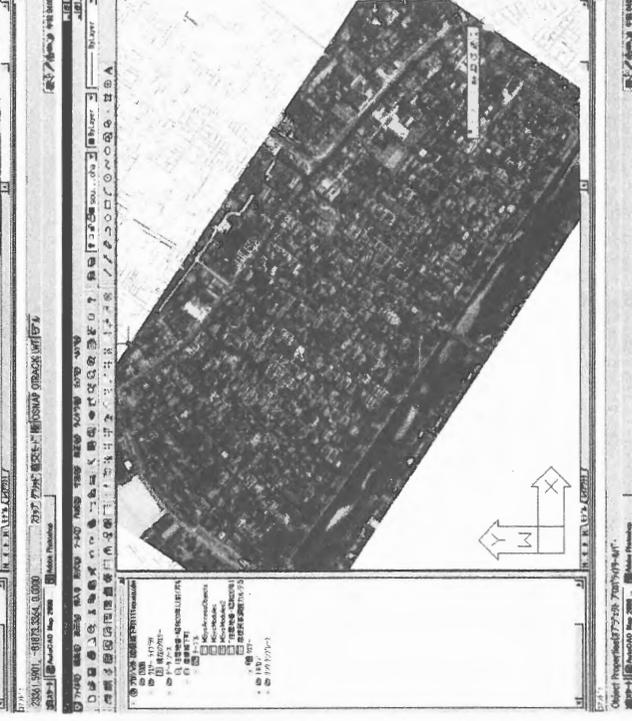
- ・航空写真(1961)

- ・彦根デジタルマップ



- ・航空写真(1982)

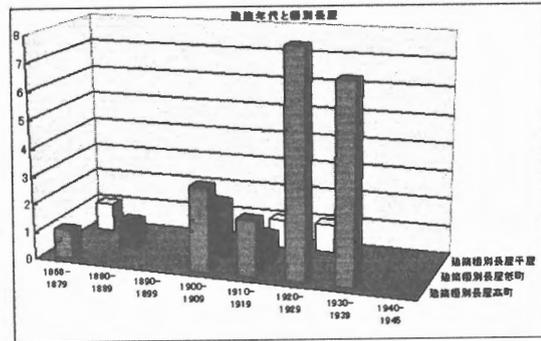
- ・彦根デジタルマップ



番号	彦根調査年代	新住所	旧住所	地番	開口	開口区分	1階軒高	2階軒高	建築種別武士住宅	建築種別町家	建築種別長屋	建築種別近代	建築種別その他	屋根	印地	地籍本数	地籍有無
512	18-19	1916	彦根1-7-36	彦根一丁目106	足跡	1237	12m以上		BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
530	17-2	1926	彦根1-4-14	彦根一丁目331	足跡	870	8m以上9m未満	734	540	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
535	17-8	1926	彦根1-4-32	彦根一丁目402,彦根一丁目4	足跡	880	8m以上9m未満	723	454	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
540	17-17	1920	彦根1-3-41	彦根一丁目510	足跡	1745	12m以上	272	473	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
541	17-18	1910	彦根1-3-41	彦根一丁目511	足跡	1005	10m以上11m未満	205	445	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
545	17-24	1900	彦根1-1-13,14,15	彦根一丁目632	足跡	2050	12m以上	248	499	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
547	17-27	1921	彦根1-2-40	彦根一丁目610	足跡	920	9m以上10m未満	278	472	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
552	17-24	1900	彦根1-1-37,38,39	彦根一丁目704,彦根一丁目7	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
553	17-25	1926	彦根2-9-25	彦根二丁目638	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
555	17-E	1900	彦根1-1-43	彦根一丁目707	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
569	18-17	1934	彦根2-8-41	彦根二丁目402-1,彦根二丁目	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
576	18-27	1926	彦根2-7-11	彦根二丁目434	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
690	22-11	1933	彦根2-8-54	彦根二丁目217-1,彦根二丁目	足跡	1980	12m以上	291	504	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
701	22-20	1921	彦根2-5-57,58	彦根二丁目121	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
702	22-21	1927	彦根2-5-58	彦根二丁目120	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
711	22-31	1930	彦根2-5-39	彦根二丁目104,彦根二丁目	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
712	22-33	1930	彦根2-4-29	彦根二丁目149-1	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
722	23-8	1930	彦根2-4-59	彦根二丁目32-1,彦根二丁目	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
724	23-10	1888	彦根2-3-11,12	彦根二丁目42-1	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
729	23-16	1930	彦根2-3-53,54	彦根二丁目708	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし
734	23-24	1925	彦根2-2-43	彦根二丁目827,彦根二丁目	足跡	BN/A		BN/A	BN/A	BN/A	BN/A	高町	BN/A	瓦	BN/A		なし

①彦根民家調査カルテデータベース  
“建築種別長屋高町”を抽出

	建築種別 長屋高町	建築種別 長屋低町	建築種別 長屋平屋	合計
1868-1879	1		1	2
1880-1889		1		1
1890-1899				0
1900-1909	3	2		5
1910-1919	2	1	1	4
1920-1929	8		1	9
1930-1939	7			7
1940-1945				0
総計	21	4	3	28



②建築年代別による建築種別長屋の分類

③ AutoCAD Map 2000上で  
“建築年代 1900-1909”  
“建築種別長屋高町”を抽出

